

山元町

再生へ

山元イチゴ・イチゴ畑



ハウス設備の再建が進み、イチゴ畑では営農が再開している



**助けて良かった、
そう思われる農家になりたい**

3月11日午後。イチゴ農家の5代目岩佐清和さんは、自宅脇のイチゴの選果場でイチゴ詰めをしていると、突然グラグラつと大きな揺れに襲われた。選果場の外に出て揺れが収まるのを待っていると、町の広報車が「津波が近くまで来ている」とアナウンスしていた。消防団に入っていた父親は巡回見回りで出て、妻と母親と祖父の4人一緒に車で逃げた。

潮が引いて4日後に戻ってみると、入り口はがれきで入れず、自宅もハウスも津波で壊されているのが分かった。先に見に行った父親から「うちはなんとか大丈夫だった」と聞いていたが、ぐちゃぐちゃに壊れた状態を見て、ショックを受けた。岩佐さんが後を継ぐという事で、両親が多額の投資をして建てたビニールハウスも泥の下に埋まっていた。

「親には申し訳ないという気持ちでいっぱいだった。父（清さん）や母（すい子さん）は、俺と弟を大学にまで行かせてくれた。

イチゴ農家

いわさ きよかず

岩佐 清和 さん(農業)

「おいしいね。もう一個」

口の中に広がる優しい甘みが特色で、もう一個、またもう一個と手が伸びるおいしきで定評のある宮城県のオリジナル品種「もういつこ」を中心に、全国有数のイチゴ栽培で知られる山元町。宮城県南部の海岸沿いに位置し、冬でも雪が積もることはほとんどない温暖な気候と、平坦な土地が広がる自然環境に恵まれ、山元町は長い間、隣接の巨理町とともに宮城県の「イチゴ生産東北一」を支えてきた。平成22年の作付面積は約37・5ヘクタール、収穫量は約1380トン、売り上げ額は約13億円。雇用や観光を含めた町の基幹産業になっている。

東日本大震災の発災当時、イチゴの収穫は最盛期を迎えていた。ところが津波によって、個人のイチゴ栽培のハウス施設だけでなく、観光イチゴ園、直売店舗も倒壊した。町内のイチゴ農家約130軒のうち、震災直後に畑や施設が無事だったのは1割にも満たない。ほとんどが畑の塩害、ヘドロの堆積、ビニルハウスなど栽培施設の倒壊や



一年は企業で働いたが、その後イチゴを継ぐことを決めて、それで父や母は俺たちのために設備投資をして新しいハウスを建ててくれた。それなのにたった1時間か2時間の津波で、全部がダメになってしまい、何千万の大型ハウスの借金だけが残った。本当に悔しかった」。

それでもうつむいてばかりはいられない。宮城県岩沼市に一軒家を借りたり、使える荷物を親戚に預けたり、一時はがれき処理の仕事をして現金収入を得ながら生活を再建する一方、イチゴ畑の泥かきを始めた。ただ、泥かきをしようにも、最初は道具さえなかった。あるだけのスコップや一輪車でコツコツと人海戦術で始めた。岩佐さんのイチゴ畑は土耕のため、何十年もかけて父が育てた豊かな土がヘドロの下に埋まっている。その豊かな土までかき出さないように、丁寧に、畝(うね)の間のヘドロだけを取り除く。そうした作業だから、重機を入れることもできない。重くて塊になっているヘドロを丁寧に取り除いていったが、一日に一つの畝しか進まないこともあった。

5月に入ると、全国からボランティアが手伝いに来てくれるようになった。団体に活動してくれるボランティアもあり、多い時で1日に20、30人を超える人が作業をしてくれた。中学生から、60歳過ぎまで、定年を迎えた人、企業関係での団体参加もあった。作業の内容を説明しながら、一緒にやっていく。泥だらけになりながらも、文句も言わないでせっせと作業をしてくれるボランティアの人との交流も生まれ、毎週のように遠方から駆け付けてくれる人も現れた。「ゼロどころではなく、マイナスからのスタートだった。ボランティアさんたちの応援で本当に元気づけられた」と岩佐さん。

周囲のイチゴ農家も大きな影響を受けていた。農家の中には、後継ぎを予定していた息子が戻らないという家もあった。岩佐さんは幼い時から、祖父も父もイチゴ栽培を熱心にやって

流出など、壊滅的な被害を受け、事業再開が困難な状況に直面した。

しかし、晩秋から年末のクリスマスシーズンに向けて出荷を実現しようと、震災からまだ半年も経たない平成23年の夏から、各農家が再建に向けて動き出した。

しかし、やはり畑に残された膨大ながれきとヘドロが大きな障害になった。町内で合計30ヘクタール以上の畑に堆積した泥やがれきを撤去するには、町内の農家だけではとうてい追いつかず、なによりも多数のマンパワーが必要だった。

そんなとき、全国から多くのボランティアが次々と山元町のイチゴ農家支援に駆け付けた。農家が何年もかけて豊かに耕した畑の上にたまった泥を、スコップを使って丁寧にすくい取っていく。根気の要る作業だったが、地元の農家と一緒に作業を進めていく中で、お互いの信頼関係が生まれた。農家の誰もがボランティアの皆さんのひたむきに活動する姿に勇気付けられ、復旧への大きな弾みになった。

「山元の復興はイチゴ復興から」

農家だけでなく、ボランティアの間でもこのような合言葉が生まれ、全国から多数のメディア関係者や芸能人、文化人も駆け付けて、イチゴ農家の被害の現状を全国に発信した。応援ソングを作ってくれるミュージシャン



いる姿を見てきた。それまで、「親が敷いてきた線路に乗ってやることはどうなんだろう」と疑問に思った時期もあったという。ただ、今回、震災で全てを失ったこともイチゴ栽培へ自分の気持ちを向ける大きなきっかけになった。「マイナスから両親と一緒に復興に向けて頑張っていこう」。そんな気持ちが湧いてきた。

イチゴ栽培の再開に向けては、泥かきのほかに、苗の確保が課題だった。津波で宮城県特産の品種「もういつこ」の苗も流されてしまったことから、栃木県の「とちおとめ」の苗をもらってきて、イチゴ農家が共同で苗の管理をすることになった。譲り受けた苗は農協が準備した保冷車で山元町まで運び、コメの育苗に使っていた大型ハウスに置いた。イチゴの品種にはそれぞれ、長所も短所もある。とちおとめは甘味。もういつこは大振りだ。

秋に入り、ビニールハウスのパイプなど、資材関係が入ってきて、ハウス建設が始まった。ボランティアの協力もあって、平成24年の11月までに大型ハウス1棟、単棟ハウスが4棟再建でき、震災前に近いぐらいの面積まで戻すことができた。

震災後の初めての収穫は平成24年の1月上旬か中旬ごろ。震災前は11月上旬が収穫時期だったため、約2か月の遅れが出た。除塩や畑の整備、苗の確保などで定植時期が遅れたのが要因。このシーズンは、気候が寒くなつてから定植したため、株自体が動かず、苗が伸びなかった。それでもイチゴ農家が協力して、休まずに収穫・出荷できたことは自信につながった。

「イチゴを植えてからも、次の年のハウス建ての作業が始まっていたので、正直言って、『初めての収穫』というような感動に浸れるほどの余裕はなかった。来る日も来る日も仕事だったので…。でも震災後に生まれた娘が1歳になって、初めてイチゴを食べてくれた時には泣きそうになった。感動でいっぱい、イチゴをやっている良かったと思えました」。岩佐さんの笑



も登場し、支援の輪が広がっていった。

平成23年9月、津波でイチゴの販売店舗を流された「夢いちごの郷友の会」が浅生原区内に仮設農産物直売所を再オープン。これが復興のシンボルとなった。11月には、念願だった震災後初のイチゴ出荷にこぎつけることができ、ぎりぎりのところで、クリスマスシーズン出荷に間に合った。

現在の課題は、各農家の資金調達。国や県などの助成金を導入しての畑やハウス施設の再建のほか、全国から支援を募る市民ファンドの立ち上げなども始まり、新しい動きも芽生えている。

山元町震災復興計画・基本構想では、J・R常磐線と国道6号の間の平野部に水田や観光農園を含めたイチゴ畑を集約して、イチゴ団地を造成するなど、農業振興による観光事業などが計画されている。

復興に取り組むイチゴ農家は行政や関係機関と連携しながら、震災後もますます大きな飛躍を目指している。

顔が輝いた。

平成24年に2シーズン目に入ると、引き続きボランティアの支援を受けながら、設備建設なども進めていった。「震災前はボランティアと聞いても、『ああ、そういう人がいるんだな』という程度にしか思わなかったのが、震災後、すごくいろいろなことをやってもらって、『ボランティアさんは本当にすごい』と思いました。もしもこれから、どこかで何かあれば、今度はボランティアとして協力したいと思うようになった」と岩佐さん。

「イチゴは、ちゃんと手を掛けると、収穫の時期にいいイチゴになる。手を掛けたら手を掛けた分、必ず帰ってくる。その良さがある」という。一方で、繊細でデリケートな作物。皮が軟らかく日持ちがしないため、栽培の間も、最後の詰める作業も手を抜くことができない。震災後は虫や雑草の問題、さらには、イチゴの種だけを食べる小さいネズミの害も出ている。そうした問題に直面しながらも、多くの支援を受けて奮闘する岩佐さん一家。

「復旧、復興というのが、前の生活に戻れるようになることだとすると、今はまだ家もないし、何年かは苦労すると思う。その先が新しいスタートになってくるのではないか。今回の被災でいろんなボランティアさんに助けてもらって、そのボランティアさんが何年か後に来てくれた時に、『ああ、助けてよかったな』と思えるような農家になっていればいいのかなと思う」





山元町 再生へ 磯浜漁港

まだまだ復旧半ばの磯浜漁港であるが
漁は再開されている。



宮城県漁業協同組合山元支所
副運営委員長

いわさ さとし
岩佐 敏さん(漁師)

ホツキ祭りを再開するのが 今の目標なんだ

震災が起きた3月11日の午後、宮城県漁業協同組合山元支所ではすでに仕事が一段落し、組合員(漁師)はほとんど事務所から離れていた。しかし、係留していた大小合わせて40艘の船と漁協支所の建物、防波堤などの施設は津波で全て流され、壊れてしまった。消波ブロックも沖合に流れてしまい、港の施設は本当に何もなくなってしまう。それでも津波が引いた後、組合員が集まって、津波が引いた田んぼの泥の中から、船の浮きなどの資材を探し出して、一つ一つ引き揚げていった。今、港には、組合員らが回収し、泥を洗い流した浮きが並んでいる。組合員は震災前の正准会員50人から16人に減ったが、見つけた船を共同で整備して自力で漁を再開した。支援を受けてプレハブの事務所が建設できたことで、組合員が集まってくるようになった。岩佐さんや漁協組合員ら仲間は、一旦は海を離れた仲間たちがやがて戻ってくることを願っている。

北部の仙台湾と、南部の福島県相馬沖沿岸の間に位置する山元町の磯地区・磯浜漁港。白浜と松並木が広がる美しい海岸線は町のシンボル。穏やかな海岸は、地域を愛する住民によつて熱心に清掃活動などの環境整備が行われている。夏になると海水浴場になるが、沿岸でも穏やかできれいな海水浴場として知られ、家族連れやサーファーで賑わう。



漁業の面からは、沖合一帯は魚のえさが豊富で、太平洋沿岸でも特に豊かな好漁場になっており、東日本有数の漁業が盛んな地域になっている。

磯浜漁港の水揚げは425トン。秋に回遊する秋サケ、サクラマスなど、サケ、マスが206トン。海底は砂地が広がるため、天然のヒラメやカレイが1222トン捕れる。さらには高値で取引されるホッキ貝など、貝類が43トン(平成21年度)。このほかにも秋から冬に南下する絶品の「寒ブリ」など天然のブリ、身がしまった真ダコ類、カニ類、フグ類など、多様な魚介類も捕れる。

それらの中でも、町の特産品となっているのが、秋から冬の海の味覚を代表する「貝の王様」、ホッキ貝。毎年2月の最盛期には、町内だけでなく、全国各地から観光客が訪れる人気の「ホッキ祭り」が開かれる。採れたてのホッキを使った海の幸たっぷりのホッキ飯の試食や、

「こうして拠点ができたことで、みんなでワイワイやりながら、これからのことを話し、考えられるようになった。俺の娘の亭主も、思い切って会社を辞めて、一緒に漁を始めている。こうしてみんなでやっていければ、仲間は海に戻ってくるだろうし、雇用も増えていくと思う」と岩佐さん。

震災後は山元町だけでなく、東北の各漁港で造船需要が高まったため、全国の造船所に注文が殺到。発注していた船の納品が遅れたが、平成24年末までに、国や県の補助金を活用したり、県外からの寄贈も生かして、現在は5艘が稼働している。

県外でマリナーを経営している人から最初の船が寄贈されたとき、漁協の組合員みんなで、「船がある。船に乗れる。海に出られる」と喜んだ。すぐ定置網を起こしに海に出た。

定置網船一艘に5、6人が乗れば十分間に合うところだが、寄贈された船には巻き上げ機がついていなかった。そこで12人ぐらゐが乗り合わせて人力で網を起こした。まるつきりの人力だったのが、「みんなで一緒に海に出て漁ができたのは、本当にうれしかったね」と岩佐さん。久しぶりの海で、みんなの掛け声が大きく弾んでいて、笑顔が輝いていたのを岩佐さんは本当にうれしく、力強く感じたという。

人気音楽グループ「ボルノグラフィティ」は、ライブで販売したチャリティグッズの収益金で、5艘目の漁船をプレゼントしてくれた。岩佐さんは「ボルノグラフィティ」のメンバーが山元町を訪れた際、「何とか漁業を復興させたいと頑張っている。貴重な船の寄贈は私たちの力になる」とお礼をのべた。

このほかにも、ボランティアの人たちがストラップなどを作って得た収益金で、大漁旗を作って贈ってくれた。「素晴らしい旗をもらえて、元気が出たね」。

全国各地の様々な人々の支援で、一艘ずつ船が増え、大漁旗もたなびいている。船の側で海を見つめる岩佐さんら漁師たち

温かいサケ汁、1個百円で焼きたてホッキ貝が先着1000人の来場者にふるまわれるなど、町を挙げての大きな交流事業となっていた。また同時に、毎年12月から翌3月にかけては、磯浜漁港の漁港事務所直接販売も続けてきた。

ホッキ貝を全国有数の特産にするため、漁協や町が中心となった取り組みが長年続けられてきた。ホッキ貝は漁獲量の変動が大きい魚介類のひとつ。このため、漁協や青年部が中心になって、漁場の特性調査とともに、漁具や操業方法に工夫を重ねた。また、持続的で安定的な漁業にも取り組んでおり、こうした活動が確実にホッキ貝の安定的な漁獲量の確保と高値安定出荷を実現した。これらの努力が評価され、平成11年に開催された「第19回豊かな海づくり大会」では、資源管理型漁業部門で水産長官賞を受賞した。

しかし今回の地震と津波で、ホッキ貝の拠点である磯浜漁港を含む周辺一帯、海岸地域は大きな被害を受けた。磯地区は今回の津波で住民515人のうち1割弱の45人が犠牲になった。



岸壁はところどころ残ったが、漁協の建物をはじめ、係留施設や消波ブロックも流された。周辺の施設も、海から山側に流れ込む河川の堤防が決壊、漁港に通じるアクセス道を含め、周辺の幹線道路は先が分からないほど泥が堆積した。港に

の表情に笑顔も増えてきた。

年間漁のサイクルは、カレイ類の刺し網、ホッキ貝、秋の定置網、秋シヤケ。放射能の関係で、スズキ、ヒラメに規制がかかり、平成24年の春の定置網漁は見送った。その間は、「秋には漁に出るぞ」という思いを込めて、みんなで秋定置の網づくりをやった。放射能の影響で魚の価格も下がり、いつ価格が回復するのか組合員の一番の心配だが、組合員の願いが通じたのか、秋シヤケもまずまずの漁で、今後も継続していくことになった。

そのほかの気がかりは、海の中の整備が進んでいないこと。海岸線から沖まで、消波ブロックやがれきが流出して、漁場が荒れてしまった。国交省と県に依頼し、海底のがれきの状態をセンサーで調査したところ、目視できないところにも、まだまだがれきが沈んでいることが分かった。平成25年3月で震災から丸2年を迎えようとしているのに、まだ完全には漁場が復旧できていない。漁協では国や県に対して、撤去に向けた支援を要請している。

市場の開設と販売ルートの開拓も課題になっている。震災前は福島県の相馬や新地の市場に水揚げしていたが、放射能の影響で福島県内の市場は閉鎖されたまま。平成24年末現在、再開の目途は立っていない。

震災直後、氷詰め、箱詰めできる場所がなく、一時はマンパワも含めて他の団体の支援を受けた。それでも「いつまでも甘えていられない」という声もあり、区切りのいいところで支援は終了した。しかしまだ販路開拓ができていない。通販、ネット販売も限られた魚しか売れないため、やはり市場を開設して、仲買人を集めることが大切になってくる。現在のところ、事務所はプレハブの仮設で、港には市場や箱詰めのための場所のほか、製氷機などの大型設備もなく、整地もされていない。



係留していた40隻の漁船はほとんどが流された。東側に隣接する高台にある海岸公園に向かう丘陵の途中まで津波が駆け上がった。

被害額は漁港施設が8億6千500万円、海岸保全施設の被害が6億3千万円で、総額14億9千500万円。文字通り、壊滅的な被害になった。

現在も復旧に向けた取り組みが進んでいる

震災直後は避難所生活を送っていた漁協組合員らも発災数ヶ月後から、漁業再開を目指して次々に集まってきた。残った船で数人が漁を再開させると、ほかの漁師も協力して、スズキの定置網作りに取り掛かった。

漁業復興のシンボルとして、支援者による大漁旗製作事業「心声(ココロ)プロジェクト」も始まった。大漁旗をなびかせながら、船が沖合いに出て行く様子が見られるようになってきている。

岸壁など港施設は、国土交通省などにより平成27年度中の完全復旧を目指して改修が進められる予定で、着実に復旧に向けて漁業者は歩み始めている。

拠点としての港の整備、市場の運営が必要になっている。風評被害からの回復も急務だ。今後も国、県を含めた行政の支援が必要になっている。

岩佐さんは磯で生まれ、磯で育ち、磯のことを熟知している。父親が漁をしている姿を見て育った。「子どものころは、接岸のための港の設備もなくて、ただの浜だった。それでも漁船が漁から帰るとみんな喜んで出迎えて、みんな船を引っ張って浜に上げたものだ。船が出るときは、みんな船を押し張って出してやったものだ」と岩佐さん。「おらが浜」「おらが港」磯漁港は、山元町にはなくてはならない漁港だ。

山元町の特産であるホッキ。毎年春先、2月の最終日曜に開くホッキ祭りの開催を今も楽しみにしているという町民の声がある。「山元のみんなにおいしくホッキを食べてもらおうのが、何よりもうれしかったし、また、みんなで楽しく集って、ホッキ祭りを再開するのが今の目標なんだ。俺は他の仕事に就くような歳じゃないから、やっぱり漁がしたいね。それに、娘の亭主や30代、40代の若い人も戻ってきて、一緒に頑張ってくれているからね。こういう若い人たちの頑張る姿を見ると、俺も頑張らないと、って思うね」と話している。



再生へ
山元町
水田



黄金色に実った稲穂



水田除塩作業の様子



水田除塩作業の様子



水田除塩作業の様子



水田除塩作業の様子

再生へ
山元町

防潮堤・道路・河川・護岸



河川の復旧工事の様子



防潮堤の復旧の様子



防潮堤の復旧の様子



復旧した道路



海岸の復旧の様子

山元町
再生へ

がれきの撤去・処理



自衛隊によるがれき処理の様子



がれき処理の様子を見守る山元町民



重機を使って撤去作業を行う様子



手作業で電柱の撤去を行なう様子



細かいがれきも丁寧に撤去していく

山元町
再生へ

がれきの撤去・処理



線路沿いの撤去作業を行う様子



がれきを集積場に運び込むトラック



集積されたタイヤなど



被災した車が集積されている様子



分別されて積み上げられる流木や木材など



稼働を続けるがれき処理施設



処理のため集められたがれきの山